「レオナルドとテストのあいだ」発表要旨（今井勉）

1892-1893 年頃のノートを読むと、ヴァレリーは『序説』や『テスト氏』を書く以前から、独自の「天才」論を構想していたことがわかる。ヴァレリー的「天才」像は「シンメトリー」と「孤独」の二語を鍵語とする。「シンメトリー」は「天才」の能力的・機能的特性に、「孤独」は「天才」の倫理的・存在的特性に関わる。ヴァレリー的「天才」論の柱がこの二要素だったとすれば、1895 年の『序説』の力点は「シンメトリー」に、1896 年の『テスト氏』の力点は「孤独」にある、とひとまずは図式化出来よう。この図式に従えば、ヴァレリーにとって、『序説』の後に『テスト氏』を書くことは、おそらく、「シンメトリー」と「孤独」の二要素を軸とする自らの「天才」論を完結させる予定通りの計画ではあったに違いない。

しかしながら、実際に『テスト氏』を書くに当たってヴァレリーは、一種の自己否定に追い込まれざるを得なかったはずだ。というのも、「孤独」のモラルの徹底化は『序説』の暗黙の前提を根底から突き崩すはずのものだったからである。事実、『テスト氏』は『序説』の根本的な枠組を破壊している。『序説』冒頭の一文に明らかな通り、『序説』の論説対象はそもそもの出だしからして「名前」と「作品」を残した人間であり、『序説』の結末は「栄光」を願うレオナルドの叫びの引用によって締めくくられていた。ところが、『テスト氏』においては、「自分の名前に対する愚かな偏執」「栄光を求めて演じられる無様な演技」といった表現に明らかな通り、「名前」や「作品」や「栄光」への執着は完全に否定されている。この断絶は、『序説』から『テスト氏』へと至る執筆展開の中で、当時のヴァレリーにおいて基本的な「栄光の廃棄」のモチーフが単なる批評倫理のレベルからより実存的な存在倫理のレベルへと尖鋭化されている事実とも対応関係にあるだろう。それでは、ヴァレリーは、この自己否定の身振りを実際のテクスト制作の現場でどのように演じたのだろうか。

或る生成論的エピソードを紹介してみたい。

『テスト氏』の中で唯一激した調子を帯びる箇所がある。「声高になって」語るテスト氏の次の科白に注目しよう。「昔は —— もう二十年も前のことだが —— 他人が成し遂げた非凡な仕事はどれも、私にとっては個人的な敗北だった。昔は、そういう仕事を見ると、自分の考えが盗まれたようにしか思えなかった。何という愚かな事か！.....自分自身のイメージが気になるなどというのは！」（下線引用者）下線部の原文« toute chose au-dessus de l'ordinaire accomplie par un autre homme, m'était une défaite personnelle. »は、実は、『序説』草稿の初期段階に見られる次の一句の焼き直しである。

> « ..à tel point que toute chose efficace et grande faite par un autre homme lui était une défaite personnelle. »（ LEONARD I, BNF ms, f° 9 v°）

レオナルドの矜恃を形容するこの断片は『序説』決定稿に生かされることはなかったが、『テスト氏』において、高揚した主人公の重要な科白の一部として復活したわけである。しかも、注目すべきことに、『序説』草稿における肯定的・積極的な意味の位相、即ち、他者が成し遂げた偉大な仕事を自らの「個人的な敗北」と考えるほどに強烈な自己の能力への矜恃と「栄光」への野心を容認する正の価値が、『テスト氏』においては否定的・消極的な意味の位相、即ち、「自分自身のイメージが気になる」「愚かな事」だとして徹底的に唾棄される負の価値へと、完全に逆転しながら復活している。ポジティフからネガティフへのこの逆転の操作は、『テスト氏』を書くヴァレリーが『序説』の枠組を意識的に破壊しようとしている姿を、テクスト生成のレベルで具体的に示しているとは言えないだろうか。

『序説』を書いたヴァレリーが、まだ存在の「栄光」に執着する若き日のテスト氏であったとすれば、『テスト氏』を書くヴァレリーは、「昔」の自分を否定する「二十年」後のテスト氏であった。一年の発表時期のずれを「二十年」の距離として仮構し、かつて『序説』草稿に書き記した断片の価値を正から負へと逆転させつつ新たなテクストに織り込むヴァレリーは、自己否定に伴う或る種の含羞をおそらくは噛みしめながら、独自の「天才」論を完結させたのではなかったろうか。